

日本出雲から未来を拓く

韓国新社会共同善運動連合による
小松昭夫理事長インタビュー



食糧支援金 500 万円を寄付 1998 年 7 月

大韓赤十字に 500 万円を自ら進んで寄付したことがあったことを記憶している人は多くはいないだろう。小松先生は「その時期に発表された、日本政府の朝鮮への人道支援中断を憂い、日本人として誰かがやらなければならない」と思い、私達の対北支援ラインである大韓赤十字社を通じて、朝鮮に対して人道的支援を実行した。



徐英勲前大韓赤十字社総裁より名誉章受章

これに対して多少時間が経過したが、大韓赤十字社はさる 7 月 19 日、小松先生が主催した小松電機産業（株）ソウル支社と、シートシャッター門番 G シリーズ発表会、(財)人間自然科学研究所が刊行した漫画「治水の偉人 周藤彌兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛」の出版記念式において、式順の時間をかりて感謝の意味を込めて名誉遺功章を彼に贈呈した。伝達は小松先生と縁がある徐英勲・前・大韓赤十字社総裁（本誌発行人）を通じて行われた。本誌はこれを契機として東北アジアを中心に世界的に活動が続けている彼に会い、本質的な意味を聞いた。

彼の活動は冷戦以後 20 年間継続されており、足跡は東アジアを超えて世界に広がっている。1992 年、韓国企業に小松電機産業（株）のヒット商品であるシートシャッター製造技術が無償で提供して、非常に



韓国・独立記念公式訪問 1997 年 6 月

高い関心をもたらして以来、1997 年には訪韓視察団をつくって韓国独立記念館を日本人として初めて訪問、献花し、100 万円を寄贈した。また 2005 年西大門刑務所歴史博物館を訪問、2007 年には安重根義士記念式典に参加、明成皇后の生家とその墓所である「ホンルン」を訪問した。そのほかに大学での講演、韓国の元従軍慰安婦のおばあさんたちへの慰問、独島問題、東海表記問題などの解決のために持続的に活動してきた。また 2005 年 12 月 7 日の真珠湾攻撃記念日に米国アリゾナ記念館を訪問、献花、寄付し、2007 年には中国南京大虐殺記念館と海南島強制労働跡地を訪問、慰霊しただけでなく、2009 年にはロシアのウラジオストックとハバロフスクを訪問し、第二次世界大戦で戦死した方々の慰霊碑に献花後、日本人シベリア抑留犠牲者慰霊碑に献花するなど、平和活動を展開してきた。



中国人民抗日戦争記念館 2001 年 5 月

また彼は孔子、孟子や、故郷の治水の偉人の銅像建立、日中英三カ国語「論語」と、時代の要請であ

る人類の本質的問題、平和・環境・健康に的を絞った中日韓英四カ国語「中国古典名言録」を出版するなど幅広い活動をしてきており、このたびは韓国語版漫画「治水の偉人」三巻を出版した。

1944 年、東海を挟んで朝鮮半島と向き合う島根県で生まれ育ち、工業高等学校を卒業、地元の農業機械の開発エンジニアとして 8 年間勤務した会社が倒産、これを契機に退社し、自宅の納屋で創業、大きな成功を収めた後、90 年代初めの冷戦終息のころから東アジア全域にまたがって平和の伝道師の役割をしてきた。日本人のなかで、和田春樹など積極的に平和活動をしている何人かの進歩的学者たちを私達は見聞きしているが、エンジニア出身の現職企業経営者が平和活動を繰り広げている、小松先生のような人は聞いたことがない。一見、彼は日本政府に代わってソフトパワー外交を広げている民間外交官と見えたりもする。また彼は発想が自由奔放でもあり、一般的な専門家たちの間からは出るはずもない、多様なアイデア群を考え出し、即刻実行に移す、逆転の発想ができる特異な専門家として見えたりもする。

現在、東北アジアは秩序再構築期にある。各国政府の立場だけでなく、民間アクター達の活動を理解することは、私達の課題といえる。小松先生とのインタビューを通じて、彼をもう少し理解してみようと思う。

小松昭夫氏インタビュー

「経緯と現実を見据え、加害側の日本人が、被害国、そして在日韓国・朝鮮人の方々に話を聞いていただくための手順を踏み、人類史の視点で展望が開けるシナリオを一緒になってつくる時に来ている」

対話・趙成斗（新社会共同善運動連合事務総長）

通訳・金美正（小松電機産業マーケティング本部長）

写真・パクソニル（課長）

日時・7月20日 朝

場所・ソウルガーデンホテル

小松昭夫先生のインタビューは「日本のある事業家が東北アジアを中心に世界的な平和活動を多岐にわたって行っている本当の意味が何かを理解し、韓国の読者たちに伝えたい」という願いを素直に示すことによって始まった。これに対して小松先生は「私の成長、活動過程は試行錯誤も多く、自分なりには共感納得いただける論理的な筋書きになっていると思っているが、未熟な部分もたくさんあると思われるので、前もってこのことを了解していただくよう希望します」という謙虚な



ソウル支社開所、門番 G シリーズ発表、
「治水の偉人」韓国語版漫画出版記念式

お答えがまず返ってきた。

（趙成斗）昨日、小松先生は小松電機産業（株）ソウル支社の開所式と、シートシャッター門番Gシリーズの韓国における発表会、「治水の偉人伝」韓国語版の出版記念式を開催されました。この一連のことは一見すると異質なものに見えますが、活動内容を通じて冷静に見ますと本質的な部分でつながっているように思えました。まずそこから質問させていただきたいのです。

（小松）本質的な部分に関心を持っていただき、大変うれしく思います。「真理は万法に通ず」という言葉があります。日本でとても尊敬されている二宮尊徳翁は、農村で事業を興し発展させた方で、自然と人間の関係について考察を深め、大きな実績と、人間としての基本的な規範をつくった方です。また石田梅岩翁は人間社会に的を絞り商人道を確立した方です。衣食住が足った社会の中で、近隣諸国より怨念を受けている戦後責任を果たす世代としての日本人の生きる意味、事業を興す意味、国家の存立する意味を深く考察する中から、二宮尊徳翁と石田梅岩翁の二人の考えに、科学と技術を加え、生命の本質、人類の特性から考察、35年にわたる会社経営、人間自然科学研究所の活動を通じて理論を構築してきました。

（趙）小松先生の考えの根底にあることをお話していただきました。

ここで 1992 年に韓国企業（株）東友 F A に無償で技術を移転なされたことがあります、これに対して質問いたします。当時、これは韓国の人たちが日本企業の人たちから期待できることを超えたこととして、「こんなことってあるんだ！」という新鮮な衝撃を与えました。その意味で、ちょっと思い起こしていただけますか？



ニュービジネス大賞受賞 1991 年 10 月

（小松）当時は経済的基盤が日本で最も弱いといわれる島根県で生まれた当社がシートシャッター門番のヒットで急成長をしている時でした。そんな中、韓国の（株）東友 F A との出会いがありました。1991

年 10 月、ニュービジネス協議会の最高賞「ニュービジネス大賞」を受賞、株式上場が近い企業として全国から注目される経営者の一人になりました。経済界やマスコミ、地域社会で話題になり、創業間もないころから始めた水道計装事業も順調で、全国からたくさんの講演依頼があり、営業を兼ねた講演活動をしていました。

1992 年 1 月、宮沢日本首相が就任後の初訪問国として韓国を訪れました。首脳会談で盧泰愚大統領から歴史認識を聞かれ、日本から韓国へ技術移転の強い要請があったことが日本の新聞に大きく報道されました。日本一の大賞をいただいた技術が無償で提供すれば、希望の生れる未来を拓くきっかけになると確信し、1992 年 2 月に島根県松江市で 250 名のお客様をご招待して開催した受賞記念式典で、技術・設計図面の無償譲渡伝達式を行い、新聞紙上で大きく報道されました。



(趙) 先生のお話を伺っていると、企業的な利得だけでは幸福にならないという心理的素養を、若い時から持っていらっしゃった方であると感じます。また企業を運命づける経営者の素養についても、近ごろ多く聞く「企業の社会的責任」を体得していらっしゃるようで、さらに「企業の歴史的責任」ということにも早くから念頭においていらっしゃったのではないかと感じました。この点に関してお話ししていただけますか？

(小松) 私の座右の銘は「中庸」です。人類の特性を考察、よりよ

く生き続けるための判断、言動、行動の追究です。変わらないことを「庸」、偏らないことを「中」といい、「対立、発展を繰り返していく様」と理解しています。「太陽に燦々と照らされる天下の大道を、闊歩する様」を表した言葉ともいわれています。

これを現代のような社会状況の中で実行するためには、哲学者カントが言っているように「通常の状態が戦争状態である人類」が、対立を発展にできる新しい枠組みを考える必要があります。

新製品を開発、市場創造するときも同じです。新しい価値を持った商材を作り、社会に送りだし、マーケットを創造するとき、利害関係者を想定、耳を傾けると多様な評価や意見が聞こえてきます。驚きと歓迎の声が広がっていくと商材に品格が備わり、ブランドが確立してきます。ライバル商品も現れ、市場がどんどん大きくなり、文化になります。

（趙）人が自然に対して示す態度、人間に対しての態度、そして社会に対しての態度が、相互に一致して、首尾一貫させなければならぬと平素から考えています。先生のお言葉の中には、中国古典の中庸という知恵を、日本の国民すなわち加害側の戦後責任を果たす立場としてとらえている、その考え方と行動と、商品を開発するときの考え方と行動が一緒であるように、お互い異質的なものを組合せ、一つの原理と態度で作用することが出来るのだということが、大きな意味をもち、次の時代を生み出すためのもととなると聞こえ

ました。

(通訳) (笑) 一致しているとお話になっていますが、これはごく自然なことですよ。願っていることと、行うこと、自分の内部と外部が一致しなかった時、矛盾が生じ、それが毒を大量に発生させて体に害を及ぼすとも考えられます。

(趙) 今までの先生の精神世界において重要な部分をお話ください。



ソウル南山公園の石碑「人類社会代表重任」

(小松) 人類には、持続と尊厳欲求を際限なく求めるという特性があります。この特性が容易に開花する環境を整えることに関わることが、衣食住が足ったのちの人がなすべき仕事だと考えています。そのための条件が基本的人権の尊重であり、安重根義士は 100 年前に、その基ともいわれる「人類社会代表重任」という書を残されています。ソウル市の南山にはこれを記した小さな石碑があります。

(趙) 安重根義士のほかの言葉は、ある程度は理解していましたが、私もその言葉は気に留めておりませんでした。



「竹島の日」開催の講演会シンポジウム「混迷の時代、出雲から陽が昇る」2009 年 2 月

(小松) 今は原本がどこにあるのか分からないそうです。2009 年 2 月 22 日の「竹島の日」に、人間自然科学研究所が日本国島根県松江市で開催したシンポジウムで、龍谷大学の戸塚悦朗先生が「人類社会代表重任」という言葉は現代社会の基本

である人権の語源であるとお話になりました。この日は、聖徳太子が一族の死をもって「和」を生み出した日ともいわれています。(2 月 22 日は日本島根県で「竹島の日」と指定され、独島の日本領有権を主張する日として活用されている。小松先生はこの日になるとシンポジウムを開催してきた。大概の日本の主張とは異なった内容のシンポジウムをしていることを言い添えておく)。

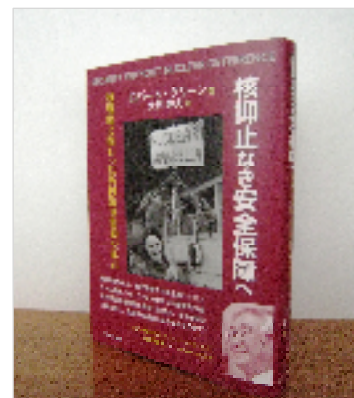
(趙) 小松先生は朝鮮半島と日本列島の世界史から見た地政学的な役割を非常に重要視されていますので、この点についてお話を伺います。

(小松) 人類の歴史から考察すると言葉、文字、グーテンベルグの印刷機が、それぞれ人類社会に大変革をもたらしました。核拡散と通貨不安定化、世界的な通信インフラの発達を背景にした、アイパッド・ 아이폰の爆発的な普及は、人類が持続的に発展するた

めの大変化を必要とする予兆と捉える事が出来ます。

米国、露国、中国の三大核大国の勢力が均衡する朝鮮半島と日本列島は、世界の不安定化・流動化・核拡散を背景に、軍事的対立が一気に高まり、先の見えない状況になっています。この地域には竹島独島領有権問題、東海・日本海の海の呼称問題を始め、日韓併合から 100 年のあいだに生まれた怨念の再生産が続いています。世界情勢の不安定化が朝鮮と韓国の対立をより深刻化させ、中国、露国、米国、そして世界への負の連鎖さえ懸念される状況になっていると認識しています。日本人の役割が、今ほど人類史の中で重要な時はないと確信しています。

私の 20 年間の活動は、危機を機会にするためのステージづくりでした。再三の小泉首相の靖国神社参拝により、歴史が現代の社会問題とし広く認識されるようになりました。その中で、中国南京戦争記念館の朱成山館長との出会いが生れ、立命館大学安斎育郎教授、国連事務総長の軍縮問題顧問であるケイ



ロバート・グリーン著「核抑止なき安全保障へ」

ト・デュース女史へと縁がつながり、夫であるイギリスの元海軍司令官ロバート・グリーン氏の最近作『核抑止力なき安全保障』の日本語版を人間自然科学研究所が支援して、原爆記念日の 8 月 6 日に出版することになりました。オバマ大統領のプラハにおける核廃絶に向けた演説、潘基文・国連事務総長と、ルース駐日本米国大使の、

広島平和記念式典初参加など一連の流れにより、再生産され続ける怨念を発展のエネルギーに転化できる光明が見えてきました。あとは共感いただける方の登場を待つだけです。道は必ず拓けると信じています。

(趙) 朝鮮半島と日本列島だけとお話になり、中国は加えないのですか？

(小松) もちろん中国は重要な隣国です。各地の戦争記念館への献花、三ヶ国語『論語』、四ヶ国語『中国古典名言録』の出版、銅像建立、中国各地で開かれたシンポジウムへの参加などを通じて、たくさんの方々との縁が生まれています。

よく日本、韓国では、「日中韓」という言葉が日常的に使われますが、中国は、米国、露国と共に三大核大国の一つであり、国連常任理事国でもあります。したがって地政学的役割が違うこの三つの国の影響を大きく受ける韓国、日本、朝鮮はこのことを念頭に、世界・人類史レベルで構想しなければ持続的発展のシナリオは描けません。

私達が小さな国であることで、卑屈になることはありません。むしろ特色のある小さな国々が力を合わせ、時間と空間の間合いを生かし、どこの国も果たし得なかった怨念の対立を人類発展のエネルギーに変えることができるまたとないチャンスが訪れていると考えることができます。その入り口の栄光ある役割を果たすのが苦労さ

れた在日韓国・朝鮮人と、真の日本の再建を追求する日本人です。
共感できる方が 10 人も集まれば啐啄同時の連鎖が起こり、時代を動かす大きなパワーになるはずです。

(趙) 一つ質問をします。真珠湾攻撃記念日(12月7日)には、アリゾナ記念館に行って戦争犠牲者たちに献花をなさり、また同じ趣旨で

ロシアに行き第二次大戦の欧州戦線で亡くなったロシア兵士の慰霊碑に献花、その後、日本のシベリア抑留者慰霊碑にも献花されました。

中国にも行き、韓国にもいらっしゃり、献花活動などをなさいますが、

日本人たちの平均的な意識は、そんな過去の交戦国へ行って献花するということに対して、理解ができない、または気分が悪いという、そんな反応がおそらくはないですか？

または、そんな活動をなさること

に対して負担感を感じることはないですか？



真珠湾攻撃式典で献花寄付 2005 年 12 月



ロシア第二次大戦慰霊碑献花 2009 年 9 月

(小松)「歴史に盲目な人間は、現在に対しても盲目である」、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」、「理念なき経済は罪悪、経済なき理念はたわごと」、「一家を廃して万家を興す」という言葉があります。過去、現在、そして未来に想定されるあらゆる問題は、持続的に楽しく生きられる社会をつくるための資源になります。問題を自分のこことして捉えられるかどうか、その人の器を規定します。歴史から生れる怨念、そして現在・未来に想定される対立のエネルギーを資源として捉えることは、激動期の経営者に必要とされる素質です。そしてこれは経営の本質です。

(趙) 今、対立と危機に対しての態度について先生のお言葉を聞いてみて考えるのですが、今回、韓国語版で出版した漫画「治水の偉人」をみると、その主人公たちが共通のマインドを持っていることに気づきます。彼らはみんな小松先生の故郷



韓国語版「治水の偉人 出雲三兵衛」出版

である島根県の先祖であり、治水のために家々が洪水に吞まれて押し流されている危機のその時にも、挫折せずに、本来の目標を追究し、結局はそれに一生をかけて成し遂げる。偉人の中の一人である周藤彌兵衛は 42 年間、金づちと鑿（のみ）で岩山を削り、川の流れを変えたのです。彼は日本版「愚公移山」ということができま

すね。おそらく小松先生は故郷の先祖のそうした強靱な精神を継承しているのではないのでしょうか？

（小松）光栄です。しかし私には 42 年間も山を削り続けることはできません（笑）。今までの人生は苦しいこともあり、たくさんの人のお世話になり、また迷惑をたくさんかけてきましたが、たくさんの楽しい思い出も残っています。そして大きな困難なときこそ頭がよくまわり、元気に満ちていたように思います。

（趙）先生は長い思考と活動の過程を通じて「和譲」という概念を発見し、これが諸々の活動の中心概念と定められるように努力していらっしゃるかと理解しております。これについて説明をお願いいたします。

（小松）「和譲」という言葉は、聖徳太子の「和をもって貴しとなす」と、二宮尊徳翁の「推譲」を組み合わせ、私の故郷の島根県松江市八雲町にある、「日本火出初之社」



千家管長と、安斎教授、金鎬逸・安重根義士記念館館長、宋錫源教授、李恵鎬安重根義士記念館部長部長との出会い

（ひのもとひでぞめのやしろ）といわれる熊野大社の前宮司で、出雲大社教管長の千家達彦様がおつくりになった言葉です。

これは現代中国の中核理念「和諧」、国連平和年と国連平和の日を

提唱された韓国の趙永植・慶熙大学校学園長が提唱された「アウトピア」、さらにオバマ政権の中核理念とされている米国ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授の発案といわれる「スマートパワー」が発表されたことを契機に、私が「和譲」の意味を定義、千家管長の許可を得て、私の理論の中核の言葉として提唱しています。

「和譲」とは3つのソフトパワー（感情を加味した知恵・使命感・会話力）と、2つのハードパワー（集団組織力・道理を実現するための方便）を、全体の文脈の中で統合することから生まれる「社会を変える力」と定義しています。

（趙）最後にひとことお願いします。



日本広島県で開かれた金容雲氏の記念講演。右が遺墨「獨立」 2010年6月

（小松）國という字があります。人類は土地の上に枠を定め、「内」「外」の概念を描き、神を発明、生命と尊厳の欲求の持続のための分業を編み出し、組織をつくり、国家を形成し、ゼロの発見を契機に科学技術を発達させ、今日をつくってきたといわれています。急速な技術革新が起きると、社会の価値観に大きな変化が起きて信が崩れ、内部対立が起き国家は崩壊します。これを防ぐ方法として戦争が行われてきました。対立を発展の契機にするためには、国家の定義と枠組みを再構築する必要があります。

100 年前の安重根義士の悲願であった、三つの地域がそれぞれ「独立」し、特色を生かして力を合わせるという構想は、核拡散の世界情勢を考えれば、大きな示唆を与えているといえるのではないでしょうか。

6 月に日本の広島市内で開かれた広島県日韓親善協会の日韓併合 100 年の記念総会において、金容雲先生が、安重根義士の遺墨「獨立」の書を前に講演なさいました。ソウルでの安重根義士義挙 100 年展で、日本にある安重根義士遺墨の韓国展示を仲介させていただいたことが縁で、今回の日本での初公開もお手伝いさせていただきました。

「対立から共生の文化」への移行は、日本海東海を挟んだ朝鮮半島と日本列島からしか始まりません。人類史の中で今、朝鮮半島と日本列島に生きている我々の「見識と知恵と勇気」が試されていると思います。

(趙) その中で、先生の役割を見つけ出されたのですねえ。

(小松) 次の時代を始めるために、共感いただける皆さんとの出会いを待っています。

(趙) 長い時間、良いお話をいただいたことに感謝をささげます。
大きな成果が生まれることを祈念いたします。 (おわり)